

今週の為替相場見通し(2025年11月10日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		152.83 ~ 154.48	153.45	151.00 ~ 155.00	
ユーロ	(ドル)		1.1469 ~ 1.1591	1.1565	1.1450 ~ 1.1650	
(1ユーロ=)	(円)		175.76 ~ 177.96	177.40	175.00 ~ 179.00	
英ポンド	(ドル)		1.3011 ~ 1.3175	1.3165	1.2900 ~ 1.3400	
(1英ポンド=)	(円)	*	199.07 ~ 202.81	201.91	196.00 ~ 206.00	
豪ドル	(ドル)		0.6459 ~ 0.6562	0.6496	0.6400 ~ 0.6600	
(1豪ドル=)	(円)	*	98.83 ~ 101.14	99.63	98.80 ~ 100.80	

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 高梨 杏光

(1)今週の予想レンジ: 151.00 ～ 155.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

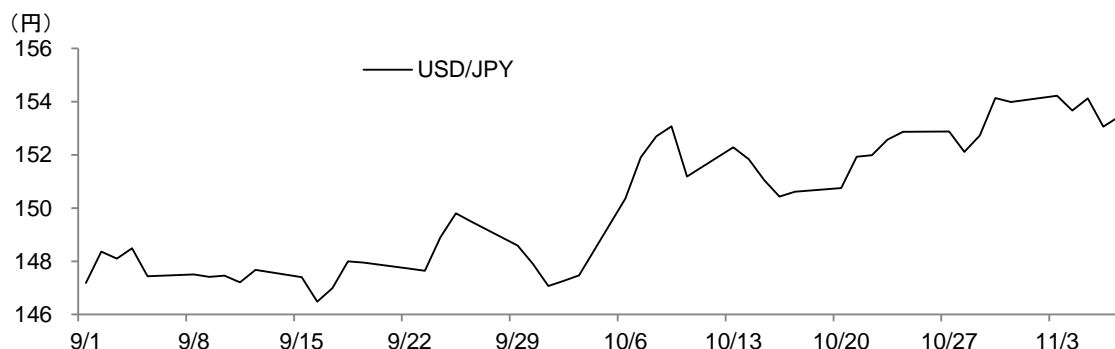
先週のドル/円は上値重く推移した。週初3日、154.20円でオープンしたドル/円は、本邦祝日で動意に乏しい中、154円台前半で横ばい推移。海外時間には、米10月ISM製造業景気指数が市場予想を下回ると154円を割り込む場面が見られた。4日、実需のドル買いで一時週高値となる154.48円まで上昇も、片山財務相の円安米発言を受け、海外時間にかけて153円台半ばまで反落。5日、日経平均株価の大幅安や米長期金利低下により152円台後半まで下げ幅を拡大したが、米金利反発につれて153円台後半まで上昇。海外時間には、米10月ADP雇用統計や米10月ISM非製造業景気指数が市場予想を上回ると154円台前半まで底堅く推移。6日、日経平均株価が上げ幅を縮小すると153円台後半で上値重く推移。海外時間には雇用指標が軟調な結果となり、7日にかけて一時週安値となる152.83円まで下落。米11月ミシガン大学消費者信頼感指数が軟調な結果となるも、米政府機関再開への期待が高まり153円台半ばまで上昇、153.45円で越週した。

今週のドル/円は軟調な展開を予想。本邦では10日(月)に10月開催分の日銀金融政策決定会合の主な意見の公表が予定されている。10月は本邦政策金利据え置きとなり、植田日銀総裁は記者会見で、今後の利上げ判断にあたり2026年春闘に向けた初動のモメンタム(勢い)を確認したいと繰り返していたものの、具体的な利上げ時期についての明言はなかった。主な意見にて、今後の利上げスタンスについてタカ派的な内容が確認されれば円買い圧力となるだろう。同日予定されている中川日銀審議委員の発言にも注目したい。一方、米国では、過去最長となっている米政府機関一部閉鎖の再開を巡る動きに注目が集まる。先週、民主党から妥協案として、年末に失効が迫る医療保険制度への補助金の1年間延長を共和党に提示したが、共和党は一蹴した。依然として先行き不透明感は強いものの、米政府閉鎖の長期化により米経済に影響が広がる中、態度の軟化が示されてきており、早期解決への期待が高まれば安心感からドル買いとなるだろう。本影響により、13日(木)に予定されている米10月消費者信頼感指数については延長される可能性が高いが、仮にインフレ鈍化を示す内容が確認された場合には、現状7割弱の12月米国利下げの織り込みは高まり、ドル売り材料となるだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(11/3～11/7)の値動き:

安値 152.83 円 高値 154.48 円 終値 153.45 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替デリバティブチーム 部坂 洋太郎

(1) 今週の予想レンジ: 1.1450 ~ 1.1650 175.00 ~ 179.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは週半ばにかけて下落となり2025年8月以来となる1.15割れの水準まで下落となるも、週後半で値を戻し往って来いの展開となった。週初3日、ユーロ/ドルは東京時間に1.1527でオープンしたのち、方向感のない値動きが続き1.1520でクローズ。米国時間発表の米10月ISM製造業景気指数は若干予想を下回るも特段値動きに反応なし。4日、ユーロ/ドルは材料に乏しい中、ドル買い地合いとなり一時1.1470台まで下落となった。5日、ユーロ/ドルは米金利上昇を背景に上値が重く、1.1480近辺で方向感のない値動きとなり1.1493でクローズ。米国時間に発表された米10月ADP雇用統計が事前予想を若干上回ったことで景気の底型さが確認された。6日、米国時間に米チャレンジャー人員削減数が大幅に増加した内容を受けて米金利低下の流れを受け、ユーロ/ドルは1.1540レベルまで上昇となった。7日、ユーロ/ドルは米11月ミシガン大学消費者マインド等の結果が予想を下回ったことを受け、ドル売り優勢のなか、週高値となる1.1591まで上昇となり、その後は値を戻し1.1565で越週となった。

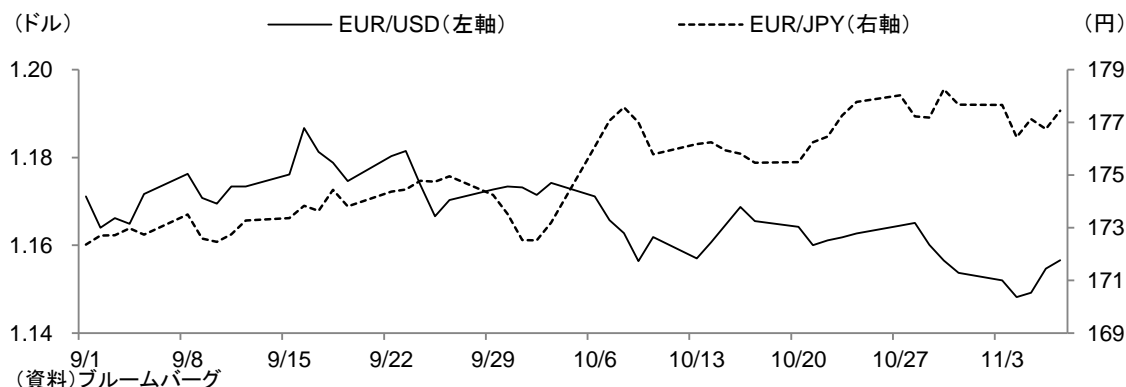
今週のユーロ/ドルは横ばいの展開を予想する。10月最終週での各国の中銀イベントを消化したなか、ユーロ/ドルの焦点は12月の米国の利下げ見通しとECBにおける2026年以降の利下げ見通しを見極めたい展開。米政府機関閉鎖に伴い情報が不足するなか、パウエルFRB議長は12月のFOMCによる利下げに関しては慎重な見方を示している。航空便の混乱といった実生活への影響が広がりつつあるなか、米政府閉鎖解消を終えて足許の経済データを確認するまでは方向感を示しづらい状況である。一方で、ECBにおいては足許のインフレ率は適正な水準であると認識している。茲許発表されたユーロ圏の経済指標は概ね良好な結果となっている状況下、ECBは年内に利下げを実施する可能性はマーケットでは織り込んでいない状況となっている。今後の金融政策を見極めるべく、ユーロ/ドルは方向感の出づらいつ展開となるのではないかと。今週発表される経済指標の予定は、11日(火)にユーロ圏11月ZEW景気期待指数、14日(金)にユーロ圏9月貿易収支、ユーロ圏7～9月期GDPの発表が予定されているほか、11日(火)～13日(木)にかけてはECB要人に関する発言も予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/3～11/7)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1469 高値 1.1591 終値 1.1565

(対円) 安値 175.76 高値 177.96 終値 177.40



3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.2900 ~ 1.3400 196.00 ~ 206.00 円

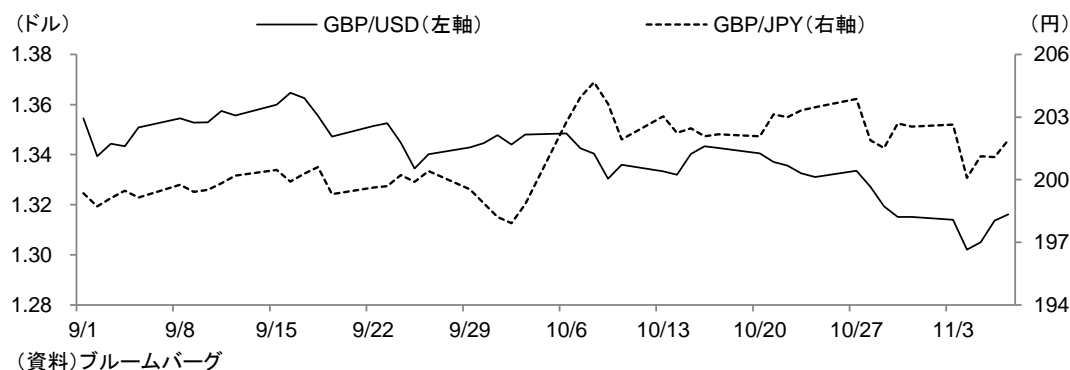
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は、対ドルで下落した。週初3日は米10月ISM製造業景気指数が市場予想を下回り、一時ドル売りで反応するも大きな動きは生まれず、終日小幅推移。翌4日はリーズ英財務相の演説を控えて月末に控える予算案への警戒感から英ポンドが売られ、その後も反発することなく終日売られた。5日、米10月ISM非製造業景気指数が市場予想を上回り、米金利上昇を伴ってドル高で反応。しかし、米政府機関閉鎖の長期化からドルが重く、6日にはBOE政策金利発表にて据え置きが発表されて英ポンドは4日の下落を打ち消す形で上昇した。票割れは5-4でハト派的であり、内容としてはディスイنفレを認め、追加のデータを見極めるための据え置きというコメントが散見された。7日は全体的にドルが弱含む中で上下し、若干強含む形で週末に渡った。

今週の英ポンド相場は、上値重い展開を想定。米政府機関閉鎖の長期化によりドル安の動きもあるが、予算案を月末に控えてユーロでは継続的に弱含んでいる。主な経済指標では、11日(火)に英9月雇用統計、13日(木)に英7~9月期GDPが発表される予定だ。英雇用データは、レスポンスレートの下落に悩まされている中、見える範囲では弱含んでいる。ディスイنفレが認められハト派的に傾きつつある中、引き続き弱い内容が出れば素直に英ポンド安になるように思う。オプション市場を見ると、一週間で1.3010レベルから1.3195レベルと比較的小幅レンジでの値動きが想定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/3~11/7)の値動き: (対ドル) 安値 1.3011 高値 1.3175 終値 1.3165
(対円) 安値 199.07 高値 202.81 終値 201.91



4. 豪ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 武藤 智哉

(1) 今週の予想レンジ: 0.6400 ~ 0.6600 98.80 ~ 100.80 円

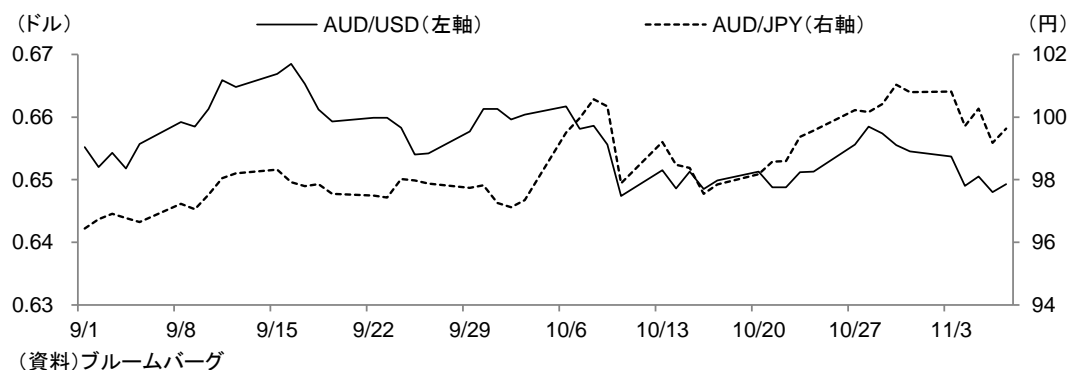
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

今週の豪ドル/ドルは総じて軟調な推移となった。週初3日、豪ドルは0.6546スタート。翌日にRBA理事会を控える中、政策金利据え置きを織り込んでか、豪金利が短期ゾーンを中心に上昇すると、豪ドルは一時週高値となる0.6562を付けた。欧州時間に入ると、株式市場の軟調な推移を横目に上値重く推移し、0.6518まで反落。4日、注目のRBA理事会では予想通り全会一致で政策金利が維持されたものの、市場の反応は限定的。その後は、米株が下げ幅を広げるなど、市場がややリスクオフムードとなる中、豪ドルは0.6481まで下落した。5日、引き続き株安が重しとなり、豪ドルは一時週安値となる0.6459を付けたが、その後は徐々に値を戻す展開。米国時間には良好な米経済指標の結果を受けて、リスクセンチメントが改善の兆しを見せると、豪ドルも0.6512まで上値を伸ばした。6日は目立った材料のない中、0.6510付近で小幅な値動き。米国時間には米民間経済指標が雇用の減速を示したことなどを受け、米株安の流れとなると、豪ドルも0.6464まで下落した。7日、前日の米国市場の流れを引き継ぎ、市場が再びリスクオフとなる中、豪ドルは上値重く推移。ただ、米政府封鎖の解除を巡る思惑が浮上すると、終盤にかけては米株が反発すると共に豪ドルも上昇に転じ、0.6496で取引を終えた。

今週の豪ドルは上値重い展開を予想する。先週のRBA会合では、四半期に一度の金融政策報告(SMP)が公表され、豪7~9月期CPIの上昇を背景に短中期のインフレ見通しが上方修正された。一方で、失業率の予測は足許の上昇を反映してやや引き上げられたものの、労働市場には依然として一定の逼迫感が残っているとし、一段の悪化は想定していない。ブロックRBA総裁の記者会見では、今後の金利方針について明言を避けつつも、利下げを急がない姿勢が示され、総じてRBAのタカ派的スタンスを強める内容となった。ただし、市場はこうしたシナリオをすでに織り込み済みであり、実際に2026年末までの利下げ見通しは約1回弱に留まっている。かかる状況下、今週13日(木)には10月の豪雇用統計が発表予定。労働市場の底堅さが確認できれば、豪ドルの上昇余地は限定的と見られる。むしろ、雇用の悪化が示される場合には、利下げ観測の強まりを通じて豪ドルが下押されるリスクの方が大きいだろう。加えて、先週以降の株式市場ではAIや半導体関連などのハイテク株に対する割高感や、米政府封鎖期間の長期化に伴う景気悪化懸念が意識され、日米株を筆頭に調整局面が続いている。今週もこうした動きが継続する場合、株式との連動性が高い豪ドルの上値を抑える要因となろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/3~11/7)の値動き: (対ドル) 安値 0.6459 高値 0.6562 終値 0.6496
(対円) 安値 98.83 高値 101.14 終値 99.63



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。